

○「驚ろいたッて驚ろかないッて、此んな怖い思ひをしたことはねエ、戯談ぢやアねエ」

△「彼の車夫は餘ほど貧乏だと見えるなア……布團でも何でも汚れへッたッて驚ろいた、併し彼の車夫ア……幽霊が附きまッてゐるなア驚ろいた、幽霊車だと言やアがる」

○「然うよ、幽霊車かも知れねへヤ」

△「ナゼ」

○「道理でおあしが無かつた」

◎寫眞の指傷

三遊亭圓左口演
石原明倫速記

お若いうちは心の迷ひで、何うかいたしまするといふと、斯う女の子に欺される……

「口惜しいから寧そのこと、彼女を殺しちゃッて、己れが死ねば宜い」

などといふ不了簡な方がございます……他人を殺して自分が死なうといふのは、詰り氣が違うやうなものでございます……此れは然やうかも知れません……大切につかへば一生ある命でございます……元と此の男子がたは、餘り男振りが宜く生れると、遂には、

「己れば、是れほどの男だから、女の惚れるのは無理はない」

ア、謂ゆる御自分に惚れる、己惚れるといふのがあります……ア、御親類縁者に、御苦勞をかけるなどといふ、不了簡なのが往々あるものでございまして、

○『御免下さいまし』

△『ヤア誰人かと思ツたら……サア此方へ上んなさい……久しく見えなかつた、何うした』

○『誠に御無沙汰をいたしました』

△『ア―毎も異なることもなくツて……私しもチヨイと尋ねようと思ツてゐるんだが、何うもソレ……年を老ると、不精になつて可ねエ……夫れゆゑツヒ／＼無沙汰をしました……能く来た……今日は久くで来たのだから、緩くり遊んで行くが宜い』

○『有りがたうございます……アノ伯母さまは、何處へかお出でなさいましたか』

△『ウン、婆さんは……今日、寺参りに出て行きましたが……』

○『然やうで、夫れは何うも……』

△『何ぞ婆さんに、用でもあるのか』

○『ヘエ』

△『後には歸るから、マア緩くり遊んでゐるが宜い』

○『イエ然う致してはなれません』

△『ナニ然うしてゐられない、偶く来たのに』

○『ヘエ、誠に伯父さんに、お目にかりませんのは、残念なツツて……
…實は今日お暇乞ひに参りました』

△「暇乞ひに来た……ウム、何處へ行くんだ」

○「エ、少々據どころなき人に頼まれて……遠方へ参りませんぢやア成りません」

△「遠方へ……何處だ」

○「へエ、少々遠方……」

△「少々遠方たつて、行く先きの分られへことばない……何處へ行くんだが、行く先きを言ッて置きなさい」

○「ナニ……何でございます……直き戻ッて参ります」

△「直きに戻ッて来るッて、行く先きが分らなくツちやア……何日何時至急な用が出来たとき、電報を打つのに、行く先きを言ッて行なくツちやア困るぢやないか」

○「ナニ……何でございます……直きに歸ッて参りますんでございます

が、據どころなく頼まれて……」

△「頼まれたのは分ッてゐる……其の先きは、何處へ行くんで」

○「へエ……」

△「行く先きが分らなくツちやア、私は遣りませんよ」

○「へエ……ナニ行かなくツても宜いのでございます」

△「何を諄られへことを言ッてゐるんだ……何うもソワ／＼してゐて、容子が變だなア……エー私は何うも、遣りたくございませんよ……お前へ顔の色が悪いやうだが、何うかしたのかエー……誰人かと喧嘩をしたのか……喧嘩をするやうな人間でもないが、何うした」

○「へエ……ナニ何でございます……お暇いたします」

△「マア待ちナ……歸らなくツても宜い……」
○「へエ……」

△「何うも容子が變だ……ハテナ……お前は何だナ、勝負ごとは餘りしないし……相場にでもかいつて損をしたのか……其んなことはないのか……ハテ、何だか氣になるナ……言ひなよ、何うした……」
○「へー……」

△「アー欺されたナ……お前ぐらゐの年恰好の時分には、随分ある……斯ういふことをして、斯ういふことをやるんだが……お前さん百圓資本を出すと、私が千圓利益あることがあるぞと、夫りや又た巧く言ッて、随分欺かす奴が幾らもある……欺されたか／＼」
○「エ……」

△「何うも手前のやうな奴を欺すてへナ惜い……己れが警を報てやる……欺されたのなら己れが警を報ッてやる……欺されたと言ひナ」

○「へエ、何うも口惜しうございます……口惜うございます」
△「フウーン、欺されたのだナ……相手は誰れだ……事由を話しな、此度己れが警を報てやるから……」

○「ちやア伯父さん、お話し申しますが……實は昨年の春、同業の新年會で、新橋の花月樓へ参りました……然處が私しは、素より御酒が、多分と飲ませんから……お酒を飲み過ぎて、心もちが悪くなりました……テ用場へ参りました……スルト其處へ、丁子屋のお静といふ藝妓が参りまして、若旦那、何うかなすツたんでございますかと、斯う尋ねましたから……ア少し飲み過ぎて、心もちが悪いんだと申しますと

……夫れぢやア、妾しが寶丹を進げませう……女中を頼んで、褥を延べて貰ひませう……然うして、少しお休みなすつたら宜うございませう……斯う言ッてくれましたから、ヂヤア然うして貰ひませうと、寢まして……フツと眼が覺めて見ますと、其のお靜へ藝妓が、チヤンと枕元にゐまして……」

△「夫れから何うした」

○「夫れから彼の……」

△「何うした」

○「アノ若旦那、少しは落ちつきましたか、ト聞きました」

△「フツン」

○「少し落ちついたやうだと申しました……」

△「成るほど……夫れから」

○「アノ落ちついたら、濟みませんが……私しも少し飲み過ぎて、心持りが悪いんですが、後甚ですから貴君の傍へ……少し何でございませう……妾しも少し心持りが悪いんですから、何うぞ貴君の傍へ……呉れませんか……デ、私しが、可ないと然う言ッたんで……可ないと然う言ッたのを……漸々と……エー、言ふもんですから……其の何なんでございます」

△「何をグツ／＼して……何うしたんだ」

○「其のとき妙な場合で……其のとき藝妓が、若旦那、是れツきりにすると承知せんよ……と言ひますから、私しも……お前も是れツきりにすると承知ないと言ッたんです」

△「其んなことは何でも宜い……ママ呆れけへツちまふ伯父の處へ来て
艶話を云ふ奴があるものか……夫れから何うしたんだ」

○「其のとき堅い約束をしまして……誠に親切な女だと、斯う思ひま
したから……末始終は伯父さんに頼つて……何うか其の女を女房
にしたいたいと、思つてなつたんでございます……然處が今日聞きますと
其の女は……他に情夫があまりまして……其の男と今日、向ふ
島の植半へ行つて……兩人で遊んでゐるといふことを聞きました……
……私しア口惜しい……始めて聞いて、腸は煮えかへるやう……口
惜くツてくくく、矢も楯も堪りません……寧ろそのこと、其の兩人を殺
して……私しも死なうと覺悟をいたしましたんで、御免……」
言ひ放つて立ち上らうとするのを、確かり押へて、

△「是うれ待て……何うも呆れた奴だ……飛んでもれエ……ママ待ち
ナ……ママ何うも、是れサ……可ねへのウ……オイ誰人かゐれへ
のか、早く来てくれ……己れ一人で仕やうがない……ママ氣を落ち
つけナ……ママ落ちつけ……是れサ、ママ落ちつけ……ママ落ち
つけツてへのに……飛んでもれエ……手前がママ、夫れほど腹が立
つなら……仕宜によれば、己れが手傳ツて殺してやる……がママ落ち
つけ……」

○「何うか伯父さん、お放しなすツて……」
△「ママ、己れの言ふことを聞きなよ……ママ手前が腹の立つも無理はな
い……が、然う手前がワク／＼して……若し遣り損なツちやア可ね
へから……ヨ、己れが手傳ツてやる……手傳ツて己れが、相手を殺し

てやるから……ママ己れの言ふことを聞け……」

○『デモ……』

△『ママサ……ママお茶一ぱい飲みな、氣をママ落ちつけて……茶を一ぱい飲みナ』

○『へエ……へエ……』

△『手前マア物をつもつて……能うく考へて見ナ……お前は、其んな愚鈍ヂヤアねへと思つた……ママ只今改ためて、私が言ふわけヂヤアねへが……お前は誠に親子の縁が薄い……二歳の年に母親に分れ婆さんが乳の世話をして居るうちに又た親父が死没り……何うも婆さんも己れも、子がねへから……ママお前を己れば、子のやうに思つて……デ親父が死亡るときに……兄さん、只た一人の忤でございま

すから、何うぞ私しの名前を、繼がしてやつて下さい……斯う言つて頼まれたから……お前も未だ年も行かねへが……お前を名前人として、番頭の喜兵衛……彼れは忠義もんだから、彼れを下後見にして……私が其の上の後見になつて、今日まで斯うやつて……己れも此ころ年を老つて、何うも不精になつて……然う都度く見廻つてもやらねへから……併しお前の方は、何と思つてゐるか知らねへが……婆さんも己れも子がねへから、未始終お前に……死水を取つて貰ふつもり……デ其の老人兩人を置いて、お前が其んな輕擧をして、已たち兩人を何うする……父母在すときには遠く遊ばずと言つて、其んな輕擧をしチヤア可れエ……能うく物を積つて、考へて見なせエ……其んな心の變つた女を殺して、

手前が一命を捨ててチヤア詰られエ……………夫れよりは、其んな女に面
 あてに、立派な婦人を女房にしちヤア何うだ……………マアく落ちつい
 て考へて見ナ……………手前が夫れほど思ッて、先方を殺すてヘナ、立
 派のやうだが……………其んな奴のお影で、自分の一命を捨てるやうでは
 詰られエ……………マアく充分く行ッて、先方を切ッたところで、手前
 が懲役……………下手く行ッて、先方へ反對に刃物を取られて、手前が
 殺されたら詰られエ……………未だ夫れよりは、手を下さずに、先方の相
 手を殺して……………テ高みで見物をする、夫れが一番宜い……………手を
 下さずに、相手の相手を殺す、夫れで懲役にも何にも行かずに事が済む
 ……………』

○「ヘエー、何がひますが……………手を下さずに、先方の相手を殺すてへ事

がありますか」

△「アー有るとも……………」

○「ド、ド、何ういふわけで……………」

△「マア落ちつきなよ……………マアお前、観音さまへ行ッて、晋の豫讓の
 額を見たか」

○「ヘエ……………」

△「彼の晋の豫讓へ人は、知伯へ人の家來であツた……………テ趙武述
 てへ人に、知伯が亡はされたのだ……………然處で残念だと言ふんで、豫
 讓が掃除番になツて、趙武述のところへ住み込んだ……………テ、或日
 趙武述が用場へ行くと、豫讓が突然り切ッてかゝると……………趙武述
 が取ッて押へて、其のときに情けふかい人だから、豫讓を一たび助けて

ヤツた……然處がモウ顔を知られたから、又たく警敵と狙ふわけに往かん……テ自から漆を呑んで、顔へ腫物が出来た……其の上を墨で塗ッて、乞食の姿になッて、橋の下に隠れてゐた……スルト或る日趙武逃馬で此の橋を通ると、馬が足を駐めて動かねエ……何でも此の下に、怪しい者がゐるに相違ないと、家來が下へ這入ッて見ると、豫讓が現はれて……其方は何者だといふと、私しは知伯の家來豫讓と申す者でございます……主人を討たれて、實とに残念でございますから、どうか君の御首を頂戴したい……テ趙武述が、アー感心なやつだ……主人の誓を打ちたいと、斯く再度まで私を附け狙ふとは、敵ながらも天晴れだ……どうかして其方に、討たれてやりたいが、今私が死ぬと、國の政事が出来んから……三年

の間だ私の命を、私に預けてくれる、三年過たら、名乗ッて其方に討たれてやる……夫れまでの契約に、是れを遣はすと、着てゐる衣服を脱て豫讓に渡した……ソコテ豫讓が、殘念だと言ふんで、劍を逆手に取ッて、是れを貫ぬく……テ血が流れた、今なら神經といふんだ……夫れを見て趙武述が、アー人の一念といふものは、恐ろしいといふんで……夫れから煩らひついて死んだといふ……其方も其の女を殺して、自分が死なふとまで決心したんだから……定めし其の女から、起請といふものか何か、斯ういふものを交換せたいふものが有るだらう……夫れを毀すなり破くなり、何うにでもすると、屹と先方へ念が通じるよ』

○『必らず通じますか』

△『夫りや、必らず通じる………何か交換したものがあるか』

○『へエ、寫眞があります』

△『寫眞がある、夫れは何寄りだ………出しナ、早く夫れへ………』

○『只今出します』

懷中へ手を入れて、モガくヤツてゐる、

△『何を愚圖くしてゐるんだ』

○『へエ、女が肌身放さず持つてゐてくれと言ひましたんで、胴守袋へ確かり入れて置きましたから………』

△『何うも否やな奴だ、見せナ………』

○『是れが女でございます』

△『ドレ………善い女だナ………此んな柔和しい顔をしてゐて、手前

を欺すなんて………憎い奴だ、サア洋小刀がある、是れで突け』

○『ハイ、有りがたうございます………ヤイお静、能く手前は、己れを欺

しやアがツたナ………手前のお影ヂヤア朋友に笑はれて恥を掻き………

………伯父さんに御苦勞をかける、皆な手前の所爲だ………此ん畜生

何うするか見アがれ』

洋小刀を取つて、アツリと突き立てます、

△『此れ、恐ろしいもんだ………何うも、寫眞から血が染出んだ』

○『へエ、拇指を切たんでございます』

◎多勢に無勢

三遊亭 金馬 口演

石原明倫 速記

エー一席申し上げます、世の中に麁忽ツかしいといふ人は、幾人もあるもんで……、尋常の麁忽かしいのは、幾人もありますが、實に自分の名を忘れるなるといふ麁忽の人は、澤山ないもので……尤も天竺にはお釋迦の弟子に、盤特といふ人が忘れたさうでございませ……日本では其んな人は、澤山ないやうな安排で……此の淺野内匠頭家來に武林唯七といふ人、大層粗忽であつたといふお話してございませ……此れは盤特と唯七と合併したほどの、粗忽な人が兩人ございませ……一人は古着を露店へ商なふ名前を太兵衛といふ、今一人は其の同居人で、名前をば武兵衛と申しませ

て、諸所の宿屋へ、小間物を商ひまする渡世で……此の兩人が粗忽ツかしいことは、一ト通りではございませ……然れど愛嬌もので、商法の掛け引は上手いもので、些とも平素の粗忽ツかしいことは、出ないのでございませから、有福に生活してをります……共に粗忽ツかしいから、大層氣が合ひまして、兄弟のごとくにしてをります……一日のこと武兵衛さん、大層喜こんで、

武『兄貴……一寸と今日は商法を休んで、運動して來やすから、何分願ひます』

太『武兵衛さん、訝だねエ……美服こんで何處へ行くんだエ』

武『今日は兩國の川開き、此の節一寸とした意外利益があつたから、散財て來やうと思つて』

太「お止し〜、お前ぐらゐる粗忽ツかしい人間は無いんだから、雑踏へ行つて、間違ひでもすると可ねへから、マア止した方が宜からう……お前が四萬六千日なぞへお参りをしたつて、御利益なぞは有りやアしないよ」

武「四萬六千日ヂヤアないよ……兩國の今日は川開きへ行くんだ……」

太「然うーか……然う間違へるから、お止しといふんだ」

武「已れの方で間違へたんヂヤアないや、お前の方で間違へるんだ……兎に角行ツて来ますよ」

太「ヂヤア氣を付けて行ツてお出でよ」

爰で武兵衛さんが兩國へ参りますると、大した人出でございませ……尤とも川開きは、幕府の時分は五月二十八日、當今より盛んでございました……並び茶屋があります、家根船、屋形、白〇〇〇、兩國の川は船で

埋りました……今日は然う参りません、柳橋に家根船が只た六艘しかない……昔とは大層變りました、然れど陸の方は賑やかでございます……橋は昔しと違ひまして、巾廣に成りましたし、人道車道と立ち分つてをりまする……晝の中からスポン〜と花火の音、此方を見ると船頭が、一人前何程といふので、客を勤めてをります……氷屋は一年の生活を、此處で皆な取らうといふので、威勢よく、

氷「氷〜……」

ト吐鳴ツてをります、日の没れ合の人といふ者は、芋採むやうでございませ……警官は其の間を保護してをります、大層い人出だ、

武「已らア一體、花火のドゥーンといふ音を聞くと、宜い心もちだ……ヤア上ツた〜……晝のうちには、黒くツて感心しねエ、夜になツて

から、奇麗なところを早く見てエナ……仕かけ物でも一つ見てへもんだ』
 ト橋の袂へ参りまする、向ふから一人駈け出して来た奴がある……武兵衛さんの胸のところへ、頭をストゥーンと打つけました、

武「オ、痛へ畜生……氣をつけやアがれ、盲目ヂヤアあるめエ……ア
 一痛エ……烈く胸へ打付かりやアがった、オ、痛かつた、氣息が留つ
 た……然うして謝りもしやアがられへで、先方へ駈け出してツちま
 つた、畜生め……ア一痛へ……ア一痛へ……水でも一杯飲まう
 かなア』

ト懷中へ手を入れますると、懷中囊がない、

武「オヤ……畜生……今の奴は盗人だ……己れの紙囊を持つてツち
 まつた、サア大變く……彼れを奪られちまつチャア、小遣も何も有

りやアしれエ……折角貯めた五圓紙幣が三枚、壹圓紙幣が二枚と、其
 の外に小出しの銀貨、皆んな奪られちまつた、水を飲むことも出来ぬ
 ……太兵衛さんに留られたが、言ふことを諾て花火へ來なきやア宜か
 った……夫れに書付が澤山這入つてらア、困つたことをしたなア……
 己れは粗忽ツかしいから、皆な帳面へ記して置いた……彼れがない
 日には、金は兎も角皆な覚えが有りやアしれエ……サア大變なことを
 しちまつたなア、何處へ行つたか、モウ追ツかけたつて間に合れエ……』
 最う其のうちに散く燈火が點いて來た、

武「息いましい、景氣よく花火をあげてゐやアがる……モウ見る氣力も衰
 るへちまつた、詰られへくく、歸らうく……』

○「モシ其處へ行くなア、武兵衛さんヂヤアないか』

武「オヤ、誰人かと思つたら、貴君は柴田さんですか」
 柴「何うしやした武兵衛さん」

武「何うしたにも斯うしたにも、只今巾着切りに紙囊を奪られました……一文なしに成りました、花火を見に来て、見ずに歸るんで……」

柴「夫りやアお氣の毒だ、マア拙宅へお寄んなさい」

武「イエ、私しや歸りませう」

柴「其んなことを言はずにお寄んなさい、御馳走しますから、マアお寄んなさい……私しやア當時此の先きで、待合茶屋を出してゐます」

武「ア柴田さん、待合をお出しなすつて……夫りやア結構です」

柴「汚れへ家ですが、米澤町で榎屋と言つて……マア宜いからお寄んなさい」

い

ト武兵衛を引ッ張ツて來て門口から。

柴「オイ〜」

女房さんが、

女「オヤお歸んなさい」

柴「途中でねエ、珍らしい武兵衛さんに遇つて、御一緒したんだ……只今街盗に紙囊を奪られたつて、氣の毒な話して……お酒が好きだから、

一ばい爛て武兵衛さんに進げれエ……サア構はずお上んなさい」

武「宜いお住居ですれエ……何うかマア穿物は女房さん、打捨ツといってお呉んなさい……誠に女房さん暫らくでしたれエ」

柴「武兵衛さん、家内ぢやアありませんよ……夫りやア當家の下婢だ」

武「ア下婢衆ですか、粗忽ツかしいもんだから」

妻「何うと暫らくですれエ、武兵衛さん」

武「イヤ、此りやア御妻君、粗忽ツかしいから、下婢衆と間違へちまつた妻、眞實に毎でも面白いこと……武兵衛さんちやア、可笑い話がある

んですよ、毎でもお前さんのお噂さばかりして……何日でしたツけ子供が柱へ頭部を打つけたら……、危ないこと、頭部の龜の尾が痛みやアしないかと、言ッたことがあツて、大笑ひをしたことが有りましてツけ」

武「其んなことも有りましてたれエ、粗忽ツかしいもんですから、何をいふか分りません」

柴「マア何しろ一ばいお飲んなさい」

ト夫婦の者が饗應してくれます、武兵衛さんも此家でお酒を御馳走になり、大

層宜い心持ちになりました、八時廻ツたらうと思つ時分に、恐ろしい往來が人聲、何かの間ちがひだらうと、下婢に聞いて見ますと……只今兩國の橋の欄干が落ち、大層人が死んだといふ、今大騒ぎ……武兵衛も實に驚るいて、

武「有りがたい……巾着切に紙巻を奪られなけりやア、己らア橋の上で、今時分火花を見てゐるんだ……屹度欄干が取れて、己れば落ツちて死ぬに違へれエ……却ツて盜賊に遇つたぼうが、運が宜いぐれへなもんだ」

柴「ヤ、其んなものかも知れない、今夜は泊ッてお出でなさい」

武兵衛も大層酔ひましたから、當家へ泊ることに相成りました……お話しが替り、太兵衛は武兵衛が歸ッて來ない……家を出たり這入ツたり、

心配しんぱいをしてをりますると、往來おもてはトリ／＼の評判ひやうはん……川開かはびらきで欄干らんかんが
取とれて、人ひとが川の中へ落ち、大層たいそう死んだ、百人だの、二百人だのと針はりほどの
ことを棒ぼうほどに言いって、騒さわいでをる……太兵衛たへゑが、驚おどろいたの、驚おどろか
ないの、

大お「ダカラ言いはねエこツチャアねエ、ヒヨツとしたら武兵衛ぶへゑの身みに、間違まちがひ
でもありほしないか」

ト心配しんぱいをしてをりましたが、トウ／＼其その夜歸よかへツて参まゐりません、

太お「こりやア死しにはしないか」

ト翌日あくるひ起きて朝飯あさめしを食たべ、兩國りやうこくへ捜さがしに行いかうと思おもふところへ、門口かどぐちから、

△「警察けいさつから参まゐりました」

太お「何なんでございます」

△「お前めさんの家とこに武兵衛ぶへゑといふ同居どうきよじん人ひとがあるそうだネ」

太お「へエございます」

△「夫それがねエ、昨夜さくや兩國りやうこくの橋はしから欄干らんかんが取とれて、陥おちつて死し去きしたといふ

久松町ひさまつちやうの警察けいさつから報知ほうちでした……此この召喚せうくわん状じやうをもつて、屍し

骸引取がいひきとりに、久松町ひさまつちやう警察けいさつまで、早速さつそく出頭しゅつとうなさい」

太お「有ありがたう存ぞんじます……女房かみさん／＼……オイ女房かみさん、

大變たいへんなことが出来できたよ……言いはねエこツちやアねエ、トウ／＼お前め

武兵衛ぶへゑが昨夜ゆふべ兩國りやうこくで死しんだてへ、警察けいさつから召喚よびだしになつた」

妻そ「夫そりのア大變たいへんですれエ、早速さつそくお前まへさん行いつてお出いでなさい」

太お「飛とんでもないことが出来できたなア……女房かみさん、羽織はおりを出だしなよ」

ト太兵衛たへゑが支度したくをいたしまして、路次ろじを出でまして四五軒けん参まゐると、向むかふから武

兵衛、宜い心もちで立ち歸ッて参りました。

武「オイ、太兵衛兄貴ヂヤアねへか……」

太「オイ、戯談ヂヤアねへぜ……お前武兵衛さんヂヤアねへか、宜い加減にしれエ……己れが言はねへこッチヤアねへぢやアねへか、雑踏を行くへと間違ひがあるからと、彼れほど止めたのを、諾なくッて出かけるから……お前が死んだッて、警察から屍骸を引取りに來いと云ふ、此の通り召喚 狀がついてゐる……」

武「エッ、是りやア大變だ、私しが死にましたエ」

太「然うよ……サ、己れと一緒に、お前の屍骸を引取りに行くんだ……一緒に行きなせエ」

武「大變なことに成りましたなア……止しヤア宜かつた……止めら

れたのを諾ないで、私しが諾ないのは悪かつた……ヂヤア太兵衛さん、お願い申します」

太「ヂヤア人力車へ乗ッて出かけやう」

ト二人乗りを頼みまして、久松町の警察まで参りました。

太「武兵衛さん確かりしねへよ、此の内に、お前の屍骸があるんだから……引取るんだよ」

武「何分宜しくお願い申します」

太「エー申します、お掛りへ申し上げます」

○「何だい」

太「私しは下谷車坂町吉田太兵衛と申します、お召喚で、同居人武兵衛の死骸を引取りに出ました」

○「ア、然やうか、少々控えてお出で……オイ、向ふに武兵衛の

死骸があるから、一寸と行ッて見て來なさい」

太「畏こまりました……武兵衛さん早く來なせエ……オ、此處だく

……ヘエ御免なさい……エ、死骸を一寸と……」

巡「親族の者かナ」

太「エ、然やうでございます」

巡「此方へ來て見なさい」

太「サア武兵衛さん見れエ、お前も此んな淺間しい姿になツちまつた」

武「情けないことに成りましたなア何うも……」

太「サア開けるから能く見れエ……ソラ何うだい」

武「へエ……是りやア太兵衛さん、是りやア私しヂヤア有りませんぜ」

太「馬鹿を言ひれエ、夫れだからお前は粗忽ツかしいんだ……自分の死

骸を見て、己れヂヤアねへがと何だ……チャアンと警察署から引

取りに來いと仰シヤツて、引取りに來たんヂヤアねへか」

武「だツて訝しいもの、私しとは違ッてゐる」

太「分られへことを言ひなさん……己れがなア、お前でねへものを、

お前を連れて態々此處まで、來るやつがあるものか……構はず兩人

で引取ッて行きヤア宜いヂヤアねへか」

武「何うしても引取れません……私しヂヤアない」

太「分られへことを言ふなア……お前、ねへ者をお前と、誰れが其んな

分られへことを言ふやつが有るもんか……宜い加減にしれへな」

拳を固めまして、背中を突然一つドワンと打ちました。

武『痛いございます、何をしますか？』

太『分られへから打なぐるんだ』

巡『オイ／＼、其處で何を兩人で言ひ争そつてゐる』

太『へエ、餘り分らないことを申しますから、私しが打つたんで』

武『分られへつて、お前さんの方が分られへんで……』

巡『一體何ういふわけだ』

武『太兵衛さんの言ふニヤア、お前が死んだから、此の死骸を引取れと斯う申すんで……』

……デございますが、何う見ても私しヂヤアないやうでございませうから、引取れないと申しました……夫れを何でも引取れと申しまして私しの脊中を打つんで……』

巡『マア一體、お前がたの言ふことはサツパリ分らん……』

……全體お前は何か

ヤ……』

太『エー私しは吉田太兵衛と申します』

巡『デお前は何といふ』

武『へエ、私しは同居人の武兵衛と申します』

巡『フウん……シテ此の死骸は何てへんだ』

太『イエ此れが、私しのところの同居人の武兵衛の死骸でございませう、』

巡『訝しいではないか……ヂヤア武兵衛が兩人ゐるのか』

太『イエ一人でございませう』

巡『ダツて此の死骸が武兵衛で、引取りに來たのが武兵衛とは訝しいヂヤア

ないか』

武『デございませうから、私しの死骸ではないと申してをるんで』

巡「分られへ人等だなア……お前が太兵衛の同居人で、武兵衛といふ者なのか」

武「然やうでございます」

巡「此の死骸は、此リヤ何といふんだ……」

武「此の死骸は、矢ッ張私しだといふんで……」

巡「馬鹿を言ひなさい、當人が其處にゐて、死骸がお前といふことは無いヤアないか……」

武「此れは少々尋ねることが有るから、此方へ來なさい」

兩人「へエ……」

巡「ア此處に斯ういふものがある、是れはお前覺えがあるか」

武「エー夫リヤア私しの紙囊で、夫れが昨夜金子をば入れまして、街盜に奪られた紙囊……」

武「夫れを持ッてるからにヤア、貴君盜賊か」

巡「馬鹿を言へ、シテ見ると其の死骸は武兵衛ではない……お前が昨夜賊に紙囊を奪られたといふところを見ると、お前の紙囊を奪った賊が、橋から落ちて死んだんだらう……」

武「此方において懐中を調べると、證據の書付が澤山あるから、太兵衛同居人武兵衛と心得て、召喚状をつけたんだ……」

武「正しく此リヤア、お前の紙囊を取った賊の死骸だ」

武「然やうでございますか、チヤア私しチヤアございませんな」

巡「當然だ、お前方兩人は、餘ほど粗忽な人だナ」

武「エー粗忽ツかしい方では、大關でございます」

巡「然うだらう……然う事が定れば、此の紙囊はお前のならば、お前に下渡してやるから、此の紙囊をもッて早く宅へ歸んなさい、此リヤ物の間違ひチヤ」

武「然やうでございますか、チヤア私しチヤアございませんな」

巡「然うだらう……」

武「然う事定れば、此の紙囊はお前のならば、お前に下渡してやるから、此の紙囊をもッて早く宅へ歸んなさい、此リヤ物の間違ひチヤ」

武「ソラ御覽なさいナ太兵衛さん……間違ひたと仰シヤる、盜賊の死骸を
見て、お前の死骸だから引取れ〜ッて己の脊中を打なぐッて、餘りと
いへば酷うございませす……恐れながら申し上げます、此リヤア何方が
善か悪いか、御裁判を願ひませす」

巡「善いも悪いもないから、お前は打たれても構はんから、早く歸んなさい」

武「戯談言ツチャア可ません……打たれて宜いてへ理窟はございません
しろくろ 白い黒いを分て下さい」

巡「幾ら言ッてもお前は勝てんよ」

武「何故でございませす」

巡「能う考がへて見なさい、太兵衛(多勢)に武兵衛(無勢)は勝たれぬヲエ」

◎蘇 生

三遊亭 圓左 口演

石原 明倫 速記

人間は此の我といふものが可んと申しますが、我れ人初め伺ッてをると、何
うも己れといふものは離れがたいものでございませす、

○「己れば斯ういふことを致たいと思ふが何うだ」

△「夫れば止た方が宜からう」

○「お前は然ういふが、己れば是非斯うする」

夫れがために大きに遣り損なひがある、是れば然やうかも知れませんデ……
油断大敵といふことを申します、

○「己れば劍術が免許の腕前だから、何んな山の中へ這入ッて山賊に出ッ

「會したって片ツ端から撫切りだ」

「假令へ免許の腕がありまして、先方に飛道具があつて取り巻れば、逆も敵ひません……或は」

△「己れは水練に長てゐるから、何んな満水の折柄でも大丈夫だ」

其の油断のために、何うも筋が緊縮ツて、遣り損なひがあるなんてへことが幾らもございます……油断といふものが謂ゆる己れがといふ我で、他人

が止せといふことは、必らず止すものです……或る學校の書生さんが、

○「今日は日曜だから、一つ僕は釣魚に行かふと思ふんだが、貴君何うだ、一軒に行かんかエ」

△「何かい、釣堀かい」

○「イヤ釣堀の釣魚デヤア面白くないデヤアないか……釣魚は海に限る」

△「海は危ないぜ」

○「危ないぜツたツて……貴君だツて僕だツて深川育ちで、子供の時分から水練を知ツてゐるから大丈夫だ……殊に此の天氣は宜し、今日は其の何だネ……方々浮遊つくより、品川沖へでも行ツて遊んでゐる方が餘ツほど面白いぜ」

△「タがねエ船乗を頼んだりなんかして、馬鹿な入費が要る……」

○「馬鹿ア言ツチャア可んぜ、船乗を頼むなんて……僕は船を使ふことは心得てるよ……夫りやアモウ確かだ……棹は三年櫓は三月だから、

ネ貴君、怒じの船乗より僕の方が、確かくらゐなものだ」

△「夫りやア危険だ」

○「大丈夫だ……船へ乗ッチャア立派なものだ、安心して同船したまへ」
 朋友に誘引れまして品川沖へ参りました。

○「何うだい貴君……斯うして竿を投げて、此の引くところを見てゐるな
 ア實に宜い心もちだ」

△「夫りやア自宅にゐるより宜い心もちだ……貴君は又た釣魚は上手だから心もちも宜からうが、僕は又た釣れんから、斯う延續に餌を取られて
 るんだ……アー引いた……引いた……」

グツと竿を上げて手に取ッて、

△「何だベラ棒め……又た餌を取られちまつた……、アー貴君のは當ッ
 た……大きいアねへか、ヤ大きい……アー何處の呼吸だか上手いれ
 エ……」

○「貴君、合せると宜いんだ」

△「合せるツてツたツて、貴君は、合せることを知ッてゐるが……僕は何
 う合せるんだか知らねエ……新道を抜けて、四ツ角で會ふてへわけに
 成るんでねへから、始末にいけねエ……オ、又た餌を取られた」

○「ソラ／＼ソラ御覽……ソラ／＼何うだ」

△「成るほど恐れ入ッた……貴君のは徒勞に上ることほねエ……ヤ有り
 がたい、僕のに大きいのが引か／＼した……ソラ、今度は上手くやるよ
 ……大きいのが引ッか／＼した、馬鹿に大きい……ヤッ……何だ、

木の枝が引か／＼して來た……弱ッたねエ、取れませんよ」
 クツと引張ると、ブツリと糸が切れました、

△「オヤ／＼……トウ／＼針が無くなッちまつた……何うも仕やうが無

いねエ』

○『ギヤア此方の竿を貸してやる、夫れは僕が仕かへてやるから貸しなさい』

△『此りやア弱ツちまつた……ホウラ今度引かゝった』

○『振り廻しちやア可けれエ、魚が一つところゐれへから……』

△『振り廻すなツてツたツて仕やうがない、踊るから……アゝ又た落ッこ

としちまつた……、今のは馬鹿に大きかつたんだが、エ……矢ッ

張り魚の方で馬鹿にしてゐるんだねエ……貴君だツてへと、スウ、

ツと魚が上ツて来る……僕の方だと、魚が然やうならと歸ツちま

ふ』

○『ナニ歸ツちまふやつが有るもんか……オイ、最う此處で釣ツてた

ツて面白くない……、何うだい、少し沖の方へ出で、大きいものを釣

つて面白くない……、何うだい、少し沖の方へ出で、大きいものを釣

らうギヤアないか』

△『危ないからお止しよ』

○『宜いてへことよ、お出でよ』

是れから精々と、沖の方へ漕ぎ出しました、我れを忘れて面白いくと釣ツ

てをりますと。

○『此りやア何うも弱ツたなア』

△『何だい貴君』

○『何うも悪い時に連れて来たねエ、向ふへ悪い雲が出て来た……刷毛目

の眞黒な雲が出て来た、悪くすると此いつは暴風だ』

△『ナニ暴風だエ……』

○『氣の毒だツたなア……宜い、マア僕が腕の續くだけ、一生懸命に逃

げる……マア錨りをお上げよ、石を……」
是れから錨を上げながら愚痴をこぼして、

△「ダカラ貴君、言はないこツチャアない……ダカラ否やだッてツたんだ」
○「マア愚痴をこぼしてるところでない……一生懸命何して……」
夫れから精々と漕ぎました、汗ビツシヨリになつた……、何うして忽ち
空は眞暗になつて参りました、摺る墨を流すがごとく……スルトボツリ
く降り始めた、風が出て来る……忽ちザアザツと雨は車軸を流す
がごとく風は漸々と烈しくなりまして、ドウドツといふ風でございます……
……見る／＼間に波が荒くなつて、ドゥドゥン……大きな山のやうな
波が参ります、

△「オイ戯談、チャアねエ……船がクル／＼廻るよ」

○「廻ッたッて詮方がねエ」

△「詮方がねへッて何うするんだ」

○「アア……僕は逆も腕は續かんよ……斯うなりやアお互ひに死を決
するより詮方がない」

△「戯談言ツチャア可ない、死を決すると言ッて……戦地へ行ッて生命
を捨るなア惜くないが、釣魚に来て生命を捨てるのは馬鹿／＼しい……」

……戯談言ツチャア可ん……」

○「愚痴をこぼすどころダアない、詮方がない……ソラ貴君何を取ッて
……」

何「何ダア分らない」

○「へ、へ、兵兒帯を脱ッて……」

△「兵兒帶を脱て何うする」

○「兵兒帶を脱つてつないでこれへ板子を結へつけて、腰へシツカリくしつけるんだ」

△「腰へゆはへてどうするんだ」

○「お互ひに腰へ緊かり結へつけて、長しんば船が轉覆けへつても、板がついてれば、沈む氣づかひはないから……夫れで流されてゐるうち、岩か何かへ擱まつてゐる、其の間だに助け船か何か来て、救つてくれるだらう……サア貴君、後生だから兵兒帶を解いておくれよ」

△「大變なことになつちまつた」

互ひに兵兒帶を取つて、板子を取つて充分に結へつけました……兩方で腰へ緊かり結へつけて、

△「是れで何うするんだ」

○「何うするつて貴君、水垢を汲ておくれ」

△「戲談言ツチャア可ん……水垢を汲くどころの騒ぎぢやアないよ、僕には迎も助からんよ……迎も助からんよ……僕ア死にますよ、ウラア」

泣き出しました……然うして兩人ながら、ヘト／＼に成ツちまひます……

……其のうちに大きな山のやうな波がザラザラドブーン……彼の大きな波の上へ、小さな船が乗せられました、スウィツと二十間も下られた時には、生きてゐる心ちはありません、又た此の船が波につき上げられますと……彼の大きな山のやうな波の上で、クル／＼と船が二三遍廻つたかと思ふと下へスウィツと下げられる、然處へ頭から波が、充分にドブんと冠さりま

した、迎も生命の助かる理由はございません……暫らく経つと耳の傍でも
ツて、ゴウツツといふ聲がいたします。

×『エー先刻から餘ほど水を吐いたやうですから、多分助かりませう……』

□『エー確かりしなオイ……確かりしな……確かりしな……心づい
たかオイく』

○『へエ……へエ』

□『心づいたか』

○『へエ、お影さまで助かりました……エー何がひまですが此處は日本の中
でございませうか』

□『イヤ心配せんでも、此處は神奈川だよ』

○『ハア神奈川で……何うも有りがたうございませう何がひまですが……』

つ 連れの者は存命でをりましたか』

□『イヤお前の朋友が……』

○『へい』

□『オイ一寸と此方へ來なさい』

△『オイ貴君……戯談ヤアない、酷い目に遭はせるぜ』

○『何うも濟まん、マア堪忍してくれたまへ……斯ういふことに成らうと
は知らないから、貴君を連れて來たんだ』

□『ヤアお前方何處の人だ』

△『へエ、僕は東京の學校の生徒でございまして……エー今日日曜で
此の者が釣魚に行かうと申しますから、釣堀かと尋ねますと……釣堀
の釣は魚の纏まつてゐるところを釣るんだから、楽しみがない……』

釣魚は海に限ると申しますから、私には危険だから否やだと申しました
 ……スルト此の者は、お互ひに水泳を心得てゐるから、大丈夫だ
 く〜と申しました……然處が大丈夫も何もありやアしません……
 夫れから船乗を頼んだり何かすると、非常に入費が要ると申しますと、
 船乗は頼まなくとも……僕は船を用ふことを心得てゐる……、棹は
 三年艦は三月だから、怒じ船乗より確かだ〜と申します、確かでも何
 でも有りやアしません……品川沖へ参りまして、釣をいたしてをり
 ましたんでございます……スルト先刻の暴風で、御當地へ吹き流され
 貴君がたのお影で、手前たちの生命が助かりまして眞とに有りがたう存
 じます……有りがたう存じます』
 □「ウン、夫りやアア運の宜いコツたれエ……品川沖から此の神奈川

落語十八番終

まで流されて来て、生命の助かる理由はないが、學校の生徒だけに、再
 たび書生(蘇生)したんだらう』

大正二年九月廿八日印刷
大正二年十月六日發行

不許複製

落語八十番

編輯者
兼
中村惣次郎

東京市淺草區旅籠町二丁目七番地

印刷者
橫田五十吉

東京市神田區松下町七番地

印刷所
合資會社
橫田印刷所

東京市神田區松下町七番地

發兌元

日吉堂

東京市淺草區旅籠町二丁目七番地

(振替東京一六一六番)
(電話谷下四九一三番)

講談文庫目錄

○赤穂義士銘々傳
 ○大久保彦左衛門
 ○朝顏日記
 ○俠客殿樣源次
 ○惡七兵衛景清
 ○水戸黃門
 ○曲垣平九郎
 ○筑紫市兵衛
 ○小栗判官
 ○俠客小金井小次郎

○立花家三勇士
 ○德川天一坊
 ○淺山一傳齋
 ○俠客賴朝小僧
 ○宇都宮鈞天井
 ○幡隨院長兵衛
 ○越後騷動
 ○東海道中膝栗毛
 ○落語十八番
 ○落語大集會

錢四金各册郵稅

錢五廿金各册定價

274

419

終

